心の旅
"Big Two-Hearted River : Part I, II" 考察

皆川香里

ニック・アダムズ(Nick Adams)は，ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961) の初期の短編集に於ける，最も代表的な登場人物である。一連のニック・アダムズ・ストーリーにはヘミングウェイの自伝的要素が色濃く表われており，ニックはヘミングウェイの分身とみなされているが，同時に，ヘミングウェイが「失われた世代」を描いたあらゆる作品の主人公の原型としても考えることができるだろう。ニックの持つ気質や人間観や人生観は，他の主人公たちに少なからず受け継がれているのである。

「インディアン部落」("Indian Camp", 1925),「拳闘家」("The Batter", 1925),「殺し屋」("The Killers", 1927) 等，ニックの物語には秀作が数多くみられるが,個々の作品はニックの体験記であり,方々の土地で様々な事件と遭遇するニックは，さながら旅人のようでもある。そしてそんなニックの人生の旅は,「心が二つある大きな川(一)(二)」("Big Two-Hearted River : Part I, II", 1925) に於いて，一つのやま場を迎える。

I

第一次世界大戦を兵士としてイタリアの地で戦ったニックは，戦後，心に深い傷を負ってミシガン州の故郷へと戻って来る。物語はニックが汽車から降り立つ場面から始められている。

> From the time he had gotten down off the train and the baggage man had thrown his pack out of the open car door things had been

different.[1)]

こうした表現は，ニックにとってこの帰郷の旅がそれまでの経験とは異質な，何処か新しい経験であることを予感させる。

興味深いのは，この作品でのニックが主体性を備えた行為者として描かれている点である。少年期から青年期にかけてのニックの成長過程を追って作品を検討すると，大抵の場合，ニックは行為者ではなく，観察者あるいは分析者として登場してきた。それは先にも挙げた「インディアン部落」、「拳闘家」、「殺し屋」等に共通する典型的な構図で，そこで起こる事件はどれもニック自身に纏わるものではなく，ニックは常に他者の人生を観察し，分析し，検証してきた。だが，「心が二つある大きな川（一）（二）」でのニックはもはや観察者ではない。ここでは登場人物はニック唯一人であり，問題となるのはニックの行為であり，彼自身の人生である。また，これまでのニックは偶然その場に居合わせたという形で事件と関わり合ってきた。言わば通りすがりの旅人であった訳だ。そしてこの作品ではニックの旅はそれ自体，目的のあるものとして設定されている。そう考えると，この帰郷の旅はニックにとって極めて個人的で，かつ意義のある経験であることが了解されるのである。

さて，汽車から降りたニックは，重い荷を背負い田舎道を抜けて川岸へとたどり着いた。この川こそがニックの旅の目的地であった。やがてニックは岸にテントを張り，夜を過ごすが，彼はテントに這い込むとしみじみとした安堵感に満たされた。

> Nothing could touch him. It was a good place to camp. He was there, in the good place. He was in his home where he had made it.[2)]

ニックはここにきて漸く落ち着ける場所を見いだしたのだ。ニックのこうした実感は，何よりも彼の戦争体験から生まれてきたものである。イ

タリアでの彼は，恐怖と憔悴のなかで日々を過ごしていた。

砲弾の飛びかう前線で任務にあたっていたニックは，夥しい数の死体を見ていた。

> Our own dead, or what he thought of, still, as our own dead, were surprisingly few, Nick noticed. Their coats had been opened too and their pockets were out, and they showed, by their positions, the manner and the skill of the attack. The hot weather had swollen them all alike regardless of nationality.[3)]

あるいは，また，まだ少年の面影を残す若い兵士が砲撃の最中に恐ろしさのあまりヒステリー状態となり，わめき声をあげる姿も目撃した。戦場はまさに死そのものであり，狂気の世界と化していた。そして勿論，死の危険はニック自身にも容赦なく襲いかかった。ニックは生まれて初めて死の存在を意識し，迫り来る死の影に震えおののくのであった。その為に，やがて攻撃の際には酒をあおる習慣が身に付いた。——こうした体験は，「人こそ知らね」（“A Way You'll Never Be”, 1933）に於いて明らかとされているが，「身を横たえて」（“Now I Lay Me”, 1927）では，前線を退いてもなお死の脅威に悩まされるニックが，不眠症に陥る様子が描かれている。

> I myself did not want to sleep because I had been living for long time with the knowledge that if I ever shut my eyes in the dark and let myself go, my soul would go out of my body. I had been that way for long time, ever since I had been blown up at night and felt it go out of me and go off and then come back.[4)]

この告白に暗示されているのは，生（覚醒）と死（眠り）のコントラストである。その狭間で揺れ動くニックは，それでも決して眠るまいと懸命になっていた。

眠れぬ夜にニックがしたことと言えば，少年時代を回想することであった。とりわけ，川での鱒釣りの記憶は鮮明で，釣りの模様は何度も繰り返して思い出された。始めから終りまで丹念に釣りのしぐさをたどるのが好きで，時には空想のなかで川の流れを作ることさえあった。

> and some of them were very exciting, and it was like being awake and dreaming. Some of these streams I still remember and think that I have fished in them, and they are confused with streams I really know.[5)]

釣りの記憶と川の流れのイメージの下に隠されているのは，ニックの「生」への執着であり，強い願望である。流れゆく水は生命のシンボルであり，水しぶきをあげて飛び跳ねる鱒は生命の躍動を伝える。死の影に怯えるニックは，いつしか「生命」の証しである川の流れを想い抱くようになったのだ。その上，記憶のなかのニックはまだ幼い少年であり，自分の死を意識するなどあり得なかった。日々は平和で，何に対する不安も無かったはずである。ニックはそうした時代の自分に再び戻りたかったのであろう。

——そして戦後，ニックは故郷を訪れ，実際に思い出の川での釣りを試みるのである。ひそやかな，しかし絶えることの無い川（生）への憧憬が，彼を遙か彼方の川岸へと導いたのであった。

II

「生」と「死」の織り成すコントラストが，「心が二つある大きな川(一)(二)」に於いて重要なテーマであることは，前述の通りである。だが，物語を一層奥行きの深いものにしているもう一つの別な対照物も，見逃してはならないだろう。それは，シニーの町(Seney)の光景と，山や川の光景である。

再び物語の冒頭の場面に目を向けてみよう。ニックが始めに汽車から

降り立った時，彼の視界に真っ先に飛び込んできたのは，変わり果てたシニーの町の光景であった。

> There was no town, nothing but the rails and the burned-over country. The thirteen saloons that had lined the one street of Seney had not left a trace. The foundations of the Mansion House hotel stuck up above the ground. The stone was chipped and split by the fire. It was all that was left of the town of Seney. Even the surface had been burned off the ground.[6)]

ほんの少しの土台石を残したきり，無惨に崩れ落ちたシニーの町は，戦後の荒廃したアメリカ社会を彷彿とさせる。かつては町の通りに軒を連ねていた酒場 (saloons) が，今は跡形もみられないといった光景は，この作品の時代背景が，かの禁酒法の時代，すなわち 1920 年代にあることを物語っている。

アメリカに於ける 1920 年代は，富と繁栄の時代であった。工業に於ける生産技術の発達は大量生産を可能にし，その新技術を導入して自動車産業，建設産業，電気産業等，各種産業界は目覚ましい発展を遂げた。景気は上景の一路をたどり，国民の生活も一段と快適になった。大量生産が引き起こした大量消費の観念は人々の暮らしに急速に浸透し，豊かでより贅沢な生活が好まれるようになった。現代に於ける物質文明，機械文明は，ほぼこの時期に完成されたのである。しかしながら物質的には豊かになった生活も，一方では精神的な荒廃を招く原因となった。戦争が終わった為の至福感と安堵感とがまず人々の心を満たし，次にはそれが安逸な暮らしをむさぼる欲求に取って替った訳である。

ヘミングウェイは「兵士の故郷」(“Soldier's Home”, 1925) のなかで，通りを行き交う女の子を眺める帰還兵の目を通して，以上のような時代の変相を巧みに描き出している。

> There were so many good-looking young girls. Most of them had their hair cut short. When he went away only little girls wore their hair like that or girls that were fast. They all wore sweaters and shirt waists with round Dutch collars. It was a pattern.[7]

とは言うものの，主人公クレブズ (Krebs) は，彼女たちを眺めはしても決して必要とはしなかった。なぜなら彼女たちは「あまりに理解しにくかった」('They were too complicated')[8] からだ。戦後の混乱と，一変して退廃的になった文明社会の生活は，クレブズの目に一種異様なものとして映っていたに違いない。そして物語は，ついに人々の生活態度に共感を得られなかったクレブズが，故郷の町から出て行くところで終っている。

クレブズの物語には，戦後のアメリカ社会に対するヘミングウェイの鋭い批判が窺えるが，「心が二つある大きな川（一）（二）」もそれと同様に解釈してよさそうである。つまり，ヘミングウェイはシニーの町を焼け野原として描くことで，アメリカ社会の荒廃に対するニック（ヘミングウェイ）の失望を表現していたのである。

失望していたのは確かだが，しかし，ニックはシニーの町に，それ以上感傷的な気持ちを抱いてはいない。むしろ不思議なくらいに無関心であった。と言うのも，ニックにはある確信があったからなのだ。——「何もかもが焼けてなくなるなんてことは，あるはずがない」('It could not all be burned')[9] のであった。そして確かに，ニックの言葉通り，彼の故郷にはまだすばらしいものが残されていた。

> Far off to the left was the line of the river. . . . There was nothing but the pine plain ahead of him, until the far blue hills that marked the Lake Superior height of land.[10]

それは雄大な自然の景観であった。太古の昔から凜として生き続ける

山や川であった。ニックの前方に横たわる川は，彼がまだ幼い少年であった頃と少しも変わらぬ姿でそこを流れていた。移り変わりの激しいアメリカ社会とは対照的に，戦前，戦中，戦後を経てなおも，川は確固たる威厳を保って変わらずに存在していた。

テントのなかでニックが感じた深い安堵感は，川の流れに秘められた不変性から生じたものでもあった。戦争は図らずもニックの内面と彼を取り巻く外の世界にそれぞれ大きな変化——〈死の認識〉と〈アメリカ社会の荒廃〉——をもたらし，ニックをひどく打ちのめし，失望させたが，永遠の不変性をたたえた川の存在は，傷ついた彼の心を癒すのに充分な役割を果たしていたのである。

ニックと川との間に結ばれた絆は，想像以上に強いものであった。だが，更に忘れてならないのは，川はもともとニックが自分で選び，自分の心を預けた，彼の本来の生活の場であるということだ。

ニックが登場する物語には川が象徴するような自然界と，シニーの町が象徴するような人間社会，ことに白人の築いた文明社会とが対比して描かれているものが多い。そしてしばしばニックはこの二つの世界の間に二者択一を迫られ，そのたびごとに自然界を彼の住処(すみか)として選び取ってきた。その最も顕著な例としてよく知られているのが，「医師とその妻」（“The Doctor And The Doctor's Wife”，1925）にみられるニックの態度である。この作品では物語の結末で，ニックは家の外にいて，彼を待つ母親のいる家には戻らず，父親とともに森の奥へと消えて行く。ニックの両親にはヘミングウェイの両親の姿がそのまま投影されており，母親には教育熱心で文化的な都会人の気質が，父親には釣りや狩猟を専らの趣味とする野性的な自然児の気質が，それぞれ与えられている。母親を捨てて父親に従ったニックは，その行為によって，母親の領域である文明社会での生活を捨て，父親の領域である自然界での生活を自分のものとして選ぶ決意を明らかに示している。

ニックにとって故郷を流れる川は，実はシニーの町よりも大切で，欠けがえのない，彼の生活の場だったのである。

III

私の貧しい小さな心は，ひどく空虚で静かで，じっとなにかを待っていたので，湖や山の霊が美しい大胆なわざを私の心に書きつけたのだった。[11)]

「心が二つある大きな川(一)（二)」に於ける最大の問題点は，釣り人ニックの行為にどのような意味があるのか，ということである。以下に引用するのはその点に関するフィリップ・ヤング（Philip Young, 1918 - ）の見解であるが，彼はニックがテントを張り，料理をし，釣りに取り掛かる動作を指して論じている。

> The action goes along against a backdrop of something only dimly seen; Nick goes through the motions now in a dead-pan, one—two—three—four routine which is rather new to him, and which suggests much less that he is the mindless primitive the Hemingway hero was so often thought to be than that he is desparately protecting his mind against whatever it is that he is escaping.[12)]

続けてヤングは，ニックが釣りの旅を計画したのは，イタリアの戦地で体験した死の恐怖から逃れる為なのである，としてこの論を結んでいる。しかしながら，「逃亡」（'escaping'）という言葉は，この場合適切であるだろうか。ニックの心情を理解するならば，「逃亡」というよりも，むしろそのまったく逆な，「挑戦」として解釈すべきではないだろうか。ニックは彼を悩ます死の恐怖にあえて立ち向かい，それを克服せんとして釣りの旅に出たのではないか，と私には思えるのだ。

私がこうした結論に至ったきっかけとなったのは，「彼（ニック）は考える必要も，書く必要も，その他のどんな必要も，いっさいを背後に置き去りにしてきたのだ。」（'He felt he had left everything behind, the need for thinking, the need to write, other needs.'）[13)] という描写であ

った。この描写は，この釣りの旅に臨んでのニックの心境を端的に表わしている。すなわち，ニックは他のいっさいの必要性を捨てて，釣りという行為に打ち込んでいるのである。では，それは一体なぜなのであろうか。——それはニックが，全霊を傾けて激しい行為に打ち込むことこそが唯一，死の恐怖を心から追い払う方法であることを知っていたからに違いない。

この確信を支えているのは，「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」（"The Short Happy Life of Francis Macomber", 1936）である。ヘミングウェイはこの作品に於いて，行動による恐怖の超克の可能性を唯一最高のものとして扱っている。

作品の主人公フランシス・マコーマーは妻とともにアフリカで狩猟をしている。だが、彼はかなりの臆病者で，ライオンをしとめることに失敗する。ところがその後，水牛を獲物に追い詰めて行くうちに，マコーマーは勇気を獲得し，みごとに水牛を撃ち倒す。

> "You know, I don't think I'd ever be afraid of anything again," Macomber said to Wilson. "Something happened in me after we first saw the buff and started after him. Like a damn bursting. It was pure excitement."[14]

生まれて初めて覚えた感覚に興奮するマコーマー。その彼とは対照的に男らしく堂々とした風格のある猟師のウィルソン（Wilson）は，マコーマーの身に突如として起きた変化を，まるで自分自身のことでもあるかのように了解している。

> More of a change than any less of virginity. Fear gone like an operation. Something else grew in its place. Main thing a man had. Made him into a man. . . . It had taken a strange chance of hunting, a sudden precipitation into action without opportunity for worrying beforehand, to bring this about with Macomber, . . .[15]

いみじくもウィルソンが言うように，進退きわまりない極限状態に置かれた人間ほど，その体内に隠された根元的な力——勇気——を発揮する者はいない。マコーマーが水牛に向って突進するまさにその瞬間，彼の心を占領していた恐怖は消え去り，代わりに久しく彼の内(なか)で眠っていた勇気が目を覚ましたのである。極限状態に飛び込んで行くことで自分の内(なか)に在る勇気を確認し，全神経を集中して激しい行為に打ち込むことであらゆる雑念——不安や恐怖——を払いのける。マコーマーは狩猟を通してこうした方法を身に付けたのであった。

「心が二つある大きな川(一)（二)」でのニックの釣りには，マコーマーの狩猟に劣らない緊張感と昂揚がある。掛かった鱒はどれも大物で，手ごたえは「まるで丸太そのものを針の先に引っ掛けたような」（'as though he were hooked into the log itself'）[16] 感じがした。水中であばれる鱒と，川の流れに逆らって鱒を捕えようとするニックとの闘いは壮絶を極め，非常な迫力がある。勝負はニックが鱒を手網に追い込むか，鱒がニックを引き倒すかである。そしてニックは，自らあえてそうした状況を作り出したのだ。自らの意志で，他のいっさいの必要性を排除して，鱒釣りに挑んだのである。

そう考えると，ニックが釣りの旅に出たのは心から恐怖を追い払う為だと結論するのも，あながち間違いではないだろう。では，そうであるなら，先程のヤングの論でも指摘されている，ニックの釣りに取り掛かるまでの動作——テント張りや料理——の単調なリズムは何を意味しているのだろうか。あるいはそれは，鱒との闘いに備えての精神統一であったのかもしれない。激しい行動に出る前に，ひとまず呼吸を整えるといった類の。

ではニックは一体何処で，行動によって恐怖を超克する方法を学び得たのであろうか。言うまでもなく，自然界に於いてである。幼い頃からの自然のなかでの暮らしが，ニックにこの野性的な技を授けたのである。自然のなかで行動的に生きるうちに，行動力によって恐怖を消し去る技

を，無意識のうちに身に付けていたのである。

ニックは戦後，戦場から持ち帰った重荷である死の恐怖を超克すべく故郷に帰って来る。マコーマーが感じ取った，あの恐怖が消え去った瞬間の晴れやかな感覚を甦らせようとして鱒との闘いに挑む。ニックは自分が最も良く知る方法で恐怖に打ち勝とうとしていたのである。

「心が二つある大きな川(一)（二)」は，釣りをする青年の物語ではない。それは，行動によって恐怖を超克せんとした青年の物語であり，青年と故郷を流れる川との絆を描いた物語である。そしてヘミングウェイはそこに，文明社会に生きる人間とは無縁の，厳しく，美しい生き方を描き出してみせたのである。

ニックの人生はまだ先が長い。行く手には何が起こるかも知れず，これからも故郷の川で釣りがしたくなる気持に駆られることが，幾たびかあるだろう。だが，どんな時にも故郷の川は，母のごとく彼をやさしく迎え入れ，父のごとく彼を鍛え直してくれるに違いない。

Notes

1) Ernest Herningway, "Big Two-Hearted River : Part I", *The First 49 Stories* (Jonathan Cape, 1944), p. 167. 以下ヘミングウェイの短編集は同様のテキストを使用し，個々の作品名及びテキストに於けるページ数のみを記す。
2) Hemingway, "Big Two-Hearted River : Part I", p. 170.
3) Hemingway, "A way You'll Never Be", p. 332.
4) Hemingway, "Now I Lay Me", p. 296.
5) Ibid., p. 297.
6) Hemingway, "Big Two-Hearted River : Part I", p. 165.
7) Hemingway, "Soldier's Home", p. 124.
8) Ibid., p. 124.
9) Hemingway, "Big Two-Hearted River : Part I", p. 167.
10) Ibid., p. 167.
11) Hermann Hesse, *Peter Camenzind,* 高橋健二訳（新潮社，1956)，p. 5.
12) Philip Young, *Ernest Hemingway,* 1st ed. (N.Y. : Rineheart & Co., Inc., 1966), p. 45.

13) Hemingway, "Big Two-Hearted River : Part I", p. 167.
14) Hemingway, "The Short Happy Life of Francis Macomber", p. 36.
15) Ibid., p. 36.
16) Hewingway, "Big Two-Hearted River : Part II", p. 182.